

2018年1月13日(土)

生・労働・運動ネット富山 〈68〉年から50年 於・サンフォルテ306号室

小杉 亮子

## 語る・語らない・語りえないのあいだ

### ——東大闘争参加者への聞き取り調査から見えてくるもの——

#### 0. はじめに

今回、生・労働・運動ネット富山から声をかけていただいたきっかけは、インターネット上の雑誌『現代の理論』に執筆した、山本義隆著『私の1960年代』(2015年、金曜日)の書評だった。とりわけ、タイトルの「語る、語らない、語りえないのあいだ」という言葉に関心を持ってくださったようだった。

そこで、当日は、このタイトルをつけるにいたった理由やそこに込めた意味から出発し、わたしの研究の内容をお話することにした。わたしの初発の関心は、1960年代学生運動参加者はどのようなひとたちだったのか、どのような運動主体だったのか、という素朴なものだった。1960年代の社会運動にかんする書籍はたくさんあるが、学生運動については同時代を経験していないひとびとにはわかりづらい、想像しづらい部分が多いと感じていた。このわかりづらさはおそらく、一部には、戦後日本の社会運動史を語るうえでの「史観」(道場 2015)の問題に由来している。史観の問題とは、特定の運動を中心に戦後日本社会運動史を語ろうとすることによって、研究者や当事者の暗黙の価値づけによる特定のアクターや運動の排除が起きるといふ、運動史の視点の問題である。

史観の問題を乗り越え、いま望ましいと語られる傾向にある運動主体・政治的主体とは異なる主体のありかたを、1960年代学生運動から探ることができるのではないかと。現代の社会運動に潜在する運動主体、希望や欲求にかたちを与えるきっかけになるのではないかと。こうした問題意識から、わたしはこれまで、東大闘争(1968～1969年)の参加者・関係者にたいする聞き取り調査を行ってきた。

#### 1. 「語る、語らない、語りえないのあいだ——山本義隆『私の1960年代』を読み解く」(『現代の理論』第8号掲載)の背景

##### ■ 東大闘争参加者・関係者の「生活史」聞き取り調査(インタビュー)

- これまで、東大闘争参加者・関係者の幼少期から現在までの人生を、テーマ(1960年代学生運動)に焦点を定めつつ、聞き取ってきた。具体的には、子どものころに好きだったこと、将来の夢、中高生時代に夢中だったこと、印象深いできごと、

社会・政治への関心の芽生え、大学入学後の経験（部活、サークル）、東大闘争、闘争後の大学生活、大学卒業後の歩みなどについて尋ねてきた。

- これまでに、東大闘争参加者・関係者 45 名にたいし、2013 年 6 月～2014 年 9 月に聞き取りを実施した。
- 福岡安則（埼玉大学名誉教授、1966 年東大入学、東大闘争の当事者）との共同調査だった。

■ 東大闘争についていっしょに聞き取り調査をした福岡安則の研究

- ライフストーリー法で被差別部落のひとつとや在日コリアン、ハンセン病者への聞き取りをおこなってきた。代表的著作に『在日韓国・朝鮮人—若い世代のアイデンティティ』（1993 年、中央公論社）がある。
- 福岡のお弟子さんである黒坂愛衣の著作には、『ハンセン病家族たちの物語』（2015 年、世織書房）がある。黒坂は自らが聞き取ってまとめた内容を、ライフストーリーを越えて「人生物語」と表現している。語り手が自分の人生を思い返し、語った物語という意味か。

■ 「語る、語らない、語りえないのあいだ」というタイトルの背景には、生活史という手法をめぐる社会学の議論がある

- 生活史とは、聞き取り（インタビュー）・文書資料分析・対象者に手記を書いてもらうといった方法によって得られる、調査対象者の life 人生／生活が記述されたものである。
- 聞き取り調査で得られた生活史については、おもに社会学において、「口述性（オーラリティ）をどのように考えるか」という点が長年議論されてきた。その結果、オーラルヒストリー（oral history）とライフストーリー（life story）という 2 つの方向性が探られてきた（有末 2012: 48）。
- インタビューの現場で語られるストーリーは生きられたヒストリー（事実）をなんらかのかたちで反映していると見なす立場がオーラルヒストリー派である。それにたいして、インタビューの場で語られるストーリーは研究者と語り手の相互行為をとおして構築されたものであり、唯一リアルなものは語りというテキストのみであると考える立場がライフストーリー派である。共同調査をしてきた福岡安則はライフストーリー派に属しているといえる。
- わたしの立場は、端的に言えばオーラルヒストリー派である。それは、限られたデータで複雑な社会的現実接近していくことしか、社会学者にはできないのではないかと考えているためだが、上記のような議論があるために、聞き取りの場で「なにが語られるのか」（＝「なにが語られないのか」）については敏感にならざるをえない。

■ 社会学者・鶴見太郎の発言を知って<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 鶴見太郎氏の発言は、2016 年 2 月 27 日第 3 回埼玉大学人文社会科学科連続シンポジウム「混成する文化—歴史と物語の交点」においてのものである。福岡安則から提供された福岡のフィールドノート「自分語りのフィールドノート②（2016.2.26～3.1） 前回は『不安定狭心症』、今回は『冠攣縮性狭心症』に、

- 鶴見は、ロシア語圏のシオニズムに関する歴史社会学的研究をしてきた。著作に、『ロシア・シオニズムの想像力—ユダヤ人・帝国・パレスチナ』（2012年、東京大学出版会）がある。
  - 鶴見によれば、多様な当事者の語りを集めることによって研究対象を体系的に理解できる可能性はある。その一方で、「当事者たちが語りたがらない、語りにくい、あるいは忘却してしまったこと、ここのなかにも、当事者を理解する重要なヒントが隠されている場合もあるのではないか」。「多様な当事者が一様に語りたがらないこと」にも、当事者をさらに理解していくヒントがあるはず。
  - 鶴見の念頭には、1917年ロシア帝国崩壊時のユダヤ人たちが置かれた状況があった。当時、ヨーロッパで最大のユダヤ人口を抱えていたのがロシア帝国だったという。ユダヤ人はマイノリティだからこそ、とれる選択肢が限られており（赤軍か白軍か）、最終的には大半が赤軍につくものの、ユダヤ人にたいする迫害（ポグロム）をしていた白軍の側についてユダヤ人もいた。マイノリティであるゆえの袋小路というユダヤ史の特徴がここにあらわれてくるのであり、このことが語られないとしたら、それはユダヤ人にとっての黒歴史ではなく、ロシアにとっての黒歴史のはずである。
  - ここには、事件直後は当事者がそのことについて語りたくないがために語られず、そのため後続世代が事件について知る機会が消失し、結果として忘却が起こって、事件について語られなくなるという構造がある。
- では、東大闘争について語られないこと、語りえないことには、なにがあるか①—女性参加者の経験
- 1968年当時の東大における女子学生の割合は3.7%だった。
  - 男子学生が圧倒的に多数派を占めるキャンパスで形成された学生運動では、男子学生を標準的参加者として想定して、戦術・戦略、個々の参加者たちのふるまいさえも形成されていたと想像できる。
  - たとえば、東大闘争の後半では警官隊をはじめとする敵手との暴力的衝突、いわゆるゲバルトが日常的に発生していた。体力面では男子学生にたいして不利であることが相対的に多い女子学生、さらに肉体的衝突に抵抗感を感じる男子学生が東大闘争に参加したいと考えたときに違和感や挫折感が生じやすかったのではないか。それだけでなく、物理的衝突に十全に参加しようの意志がある男子学生と、そうではない女子学生と一部の男子学生とのあいだに亀裂が入りやすい状況であったと思われる。ここから、1960年代学生運動における直接行動で、いかに「ゲバルト」が重視されていたかがわかる。
  - そこから語られることが少ない視点こそが、逆に運動の特徴を物語っているケースといえる。
  - 一方で、男子学生たちは学園闘争を肯定的かつ祝祭的に回顧し、他方で、女子学生たちは学園闘争での違和感や挫折がフェミニズムへと連続した過程として学園闘争を描くという、ジェンダーで分かれた回顧が日本では続いている（Schieder 2018）。

---

同シンポジウムの音声起こしが収録されていたことによって、鶴見氏の発言を知ることができた。

■ 東大闘争について語られないこと、語りえないことには、なにがあるか②—語りづらさを抱えた当事者の経験

- 加齢や病気、個人的な好みといった理由ではなく、1960年代学生運動と関連する理由から語りたくない人が存在することを、聞き取り調査をしていくなかで認識するようになった。当事者から、東大闘争については「一生言わないほうがふつうの感覚」と言われたこともある<sup>2</sup>。
- 新左翼党派関係者の語りづらさは、ひとつの理由として、現在所属している場合はもちろん、すでに脱退している場合も、活動にかんする証言を行うことで直接的に本人や仲間が不利益を被る可能性から生じていると考えられる。党派を脱退するさいに外部に情報を漏らさないことを約束することもあるという。
- それ以外に語りづらさを抱えている当事者がいる理由を、ある聞き取り対象者は次のように推測してくれた。第一に、東大闘争は長期にわたって大学執行部と対峙し、学内の建物を占拠しストライキを続けるという非日常的な環境だったので、その後の生活や現在との断絶が大きいのではないか（3.で触れる東大闘争における予示的政治と関連している論点である）。第二に、東大闘争終結直後は東大闘争について語るとなにかしら不利な事態に陥る可能性を感じさせる情勢が続いたため<sup>3</sup>、関係していた人びとが沈黙するようになってしまったことも関係しているのではないか<sup>4</sup>。これは、鶴見太郎が指摘した、忘却によって語られなくなる構造である。

■ 東大闘争について語られないこと、語りえないことには、なにがあるか③—暴力をふるった経験、ふるわれた経験

- 聞き取り調査のなかで、ゲバ棒やヘルメットによる防衛や示威行為をした経験、すなわち当時の言葉で言えば「象徴的暴力」を行使した経験は、躊躇なく語られる傾向にある。
- また、自分が敵手に振るった暴力について語れる語り手、自分が受けたリンチについて語れる語り手もいる。こうした語り手たちは、当時のことについて相当、対象化もしくは理論化できているのではないだろうか。すなわち、特異なリーダー的存在の学生には、このような暴力についての語りが可能なのではないだろうか。たとえば、東大闘争後半期には学生間の対立が暴力によって昂進したが、この時期についてみんなが「頭おかしくなっただと表現する民青系学生や、東大闘争後半期の「捕虜交換」について証言した全共闘派学生がいた。
- しかし、自分がふるった暴力、ふるわれた暴力、ふるえなかった暴力によって心身が傷ついた学生のなかには、語りにくさを抱えたままのひとも多いだろう。
- さらに、東大生ではないが東大闘争に参加して暴力をうけた、暴力をふるった学生も少なくない数でいたと思われる。こうした学生の存在については、東大闘争

<sup>2</sup> 2013年10月18日のフィールドノートより。

<sup>3</sup> この点については、1960年代学生運動を受けて警察庁が1960年代後半から1970年代にかけてポリシング戦略を巧妙化させ、「自分勝手に残虐な『過激派』」（安藤 2013: 134）という社会運動家イメージをメディア上につくり上げることに成功したという安藤丈将（2013）の指摘が重要である。

<sup>4</sup> 2014年1月31日のフィールドノートより。

研究という枠組みでは想起されにくいことによって、語られなくなるという問題がある。

## 2. 東大闘争の概略

- それでは、東大闘争について語られることから、なにが見えてくるのだろうか。3.で、東大闘争参加者・関係者への聞き取り調査から見えてきたことを議論する前提として、ここでは簡単に、東大闘争のプロセスを紹介しておきたい。
- 発端は、1964年から全国の医学部学生たちが続けていた、インターン制度廃止闘争だった（1967年からは登録医制度廃止闘争）。
- 1968年1月29日、東大医学部は全四学年がストライキに突入。ストライキのなかで、退学処分4名を含む合計17名という類例のない学生大量処分が医学部教授会によっておこなわれた。しかも処分された学生のうち1名は処分理由となった事件に関わっていなかったことが明らかになり、医学部生と医学部当局の対立が決定的になった。
- 1968年6月15日、医学部生たちが本郷キャンパスにある安田講堂を占拠した。これにたいし、東大当局は6月16日に機動隊を導入した。当時の学生たちや教員の感覚からすれば大学自治を侵す暴挙であり、これによって他学部にも抗議活動が広がり、闘争の全学化した。
- 6月26日の文学部を皮切りに、医学部学生の不当処分や機動隊導入に抗議して、各学部の学生たちが続々と無期限ストライキに入った。
- 7月5日、学部ごとのストライキ実行委員会や新左翼諸党派が糾合して「東京大学全学共闘会議」（以下、東大全共闘）が結成された。
- 10月2日、法学部の学生たちがストライキを決議したことで、全学部が無期限ストライキに入る。教育学部は民青主導、ほか9学部は全共闘系主導だった。
- 東大闘争が長期にわたって続くなかで、全共闘系学生たちのなかから、登録医制度や不当処分といった個別の問題を越え、東京大学や研究者のあり方、さらにはそこで学ぶ自らのあり方を問う動きが出てきた（全共闘のスローガン「大学解体」「自己否定」）
- 1968年11月、日本共産党の方針転換によって、民青系の学生たちがストライキ推進からストライキ終結へと態度を変更した。民青と一般学生によって形成されたストライキ収束勢力と大学当局とが交渉を進めていくことになった。
- 1969年年1月10日、7学部の学生代表団と大学当局とのあいだで「10項目の確認書」が締結される。これと前後して各学部でストライキが解除されていく。
- 1969年1月18・19日、確認書締結後も全共闘系学生の一部は安田講堂占拠を続けていた。2日間にわたって機動隊と大規模な衝突を繰り返して、最終的には排除された（安田講堂攻防戦）。
- ただし、すぐにキャンパスが平常に戻ったわけではない。全共闘系学生たちは確認書による闘争の終結に納得せず、再度の機動隊導入の責任を大学当局にたいし追及しようと試み、授業再開阻止に動いた。ストライキが最も長く続いた文学部では、スト解除は1969年12月だった。

### 3. 東大闘争について語られること — 東大闘争における予示的政治の探究

- 東大闘争は、民青、新左翼、ノンセクトという異なる性格をもった三層の参加者たちが、それまでの左翼学生運動を前提にそれぞれの学生運動を形成した点において、広くは日米安保体制や冷戦構造、ベトナム戦争、局所的には東大内における不正義を前におこなった運動文化の実験と創造の場・時期だった
  - 高島通敏（1977）はその「革新国民運動」論で、戦後大衆運動の主要な担い手であった戦後革新国民運動の特徴を詳しく分析している。革新国民運動は、表面上のリーダーシップをとるいわゆる進歩的文化人、実際の運動の中核を担う総評系の労働運動、政治的中枢を担う社会党から構成されており、1956年以降はそこに共産党も加わった。60年安保闘争において、革新国民運動が持っていた、戦略面・思想面の限界が露呈すると同時に、この運動を批判し、新しい運動を形成しようとする人びとも見られた。それが、のちにベ平連につながっていく声なき声の会と、新左翼党派のひとつ共産主義者同盟（ブント）だった。
  - 東大でも 1960年代をとおして、革新国民運動の一翼を担っていた左翼学生運動への批判とオルタナティブの模索がみられた。具体的には、60年安保闘争時には「ノンポリ」と呼ばれた学生たちが、東大闘争には「ノンセクト」として参加し、東大闘争の過程のなかで「ノンセクト・ラディカル」と自称・他称するようになっていった。
  - 全共闘運動には、ふたつの側面があった。第一に、学部生や大学院生、おもだった学生組織、また新左翼党派が参加し、諸代表が協議して東大闘争の方針を決定する、共闘のための“組織”だった。同時に、第二に、とりわけノンセクト系の学生たちにとって、新旧左翼政党によって集会やデモに動員されるそれまでの左翼学生運動とは異なる学生運動として、どのような組織構造や意思決定方法にもとづくものがありえるか、それはいかに形成しうるかという問題意識を反映した、新しい学生運動のありかたを象徴する表現だった。
  
- では、東大闘争で模索された新しい学生運動の行動原理・組織原理とは、どのようなものだったのか。東大闘争の感想や個人的な総括、参加をとおして得た価値観、参加にあたっての方針にかんする参加者たちの語りには、参加者間で考えや意見が大きく割れる、ふたつの争点があった。後述するように、このふたつの争点は、予示的政治と戦略的政治の対立として整理できる。このうちの予示的政治こそ、東大闘争で模索された社会運動のオルタナティブな方向性だった
  
- 第一の争点は、社会変革について考えるさいに対象とする範囲をめぐる対立だった
  - 変革の範囲を、最大にとれば社会体制を変革する革命（revolution）となり、最小にとれば自己を変える自己変革（self transformation）や自己解放（self liberation）となる。
  - とりわけ、社会主義・共産主義革命をめぐる評価において、この対立が明確に見られた。
  - 全共闘派の学生たちは東大闘争の展開過程から収束過程にかけて、政府・自民党

による日大闘争への介入や、入試実施を手段にした東大執行部への圧力、武力の点において圧倒的に優位に立つ機動隊によるキャンパスからの排除を経験した。また 1969 年には、大学にたいする政府権限を強化しようとする政府・自民党によって、「大学の運営に関する臨時措置法」(大学措置法)が衆参両院での強行採決をへて制定された。全共闘派の学生たちは、大学執行部と教員たちの硬直的対応によって学内の変革を実現することの難しさに直面しただけではなく、国家権力による運動にたいする抑圧にも直面することになり、マクロ権力を敵手とする運動とは異なる方向性を探らざるをえなかった。これによって、変革の範囲を相対的に小さく、すなわち国家権力ではなく社会内権力の問い直しへと向かうようになった。

■ 第二の争点は、社会変革のために遂行する行為の基準をめぐる対立だった

- 運動のなかでの行為を目的実現にむけた手段的 (instrumental) なものと見なすか、もしくは、行為自体が社会変革を構成する自己充足的 (consummatory) なものと見なすか。
- 漸進的な改革や、ある程度での妥結を賢明な判断として評価する語りが、民青系や新左翼党派のシンパ・同盟員だった学生から聞かれた。活動家としては、全共闘派が“敗北”する可能性が濃厚になった段階でなんらかの妥協が必要だと判断せざるをえなかったのではないかと、いうように。
- 民青系学生からは、なんらかの妥結のためには考えが異なる人びとも手を結ぶこともありえるという語りも聞かれた。社会変革のためには戦略的に漸進的手段をとることが現実的だと見なす態度であり、たとえば、1968 年 11 月以降それまで対立していたストライキ反対派の学生たちと、一転して民青として手を結んだことについて、こうした語りが現れる。
- これにたいして、ノンセクト・ラディカルは、社会主義革命への道程として、もしくは政治闘争の一部として、新旧左翼政党・党派が手段的に学園闘争を位置づけていることに反発していた。ノンセクト・ラディカルの学生が、東大闘争のさなかにおける自分たちの学科での営みを「理想の社会」ととらえる態度に、闘争のなかでの行為を自己充足的なものとして見なす姿勢を見て取れる。

■ 東大闘争に見られた、予示的政治と戦略的政治の対立とはなにか

- 予示的政治 (prefigurative politics) では、社会運動の過程そのもののなかで、運動が望ましいと考える社会のありかたを予め示すような関係性や実践、政治の形態をつくりだし、維持することがめざされる (Graeber 2004=2006; Holloway 2002=2009; 稲葉 2010)。予示的政治が批判してきたのは、「各々の社会運動はそれぞれが掲げる理想の社会を構成する論理=ロゴスに到達するための手段」(稲葉 2010: 14) だと考えるかぎり、「今ここで運動にかかわっている人の『生』のあり方そのものはカッコに入れられてしまう」(稲葉 2010: 14) ことだった。1990 年代以降の反グローバル化運動の理論的根拠とされ、注目を集めてきたが、アメリカの“1968”に予示的政治を見出す議論がすでに 1980 年代に提出されている (Breines 1982)。

- 戦略的政治 (strategic politics) は、マクロな権力に挑戦し、政治や経済、社会制度を大きく変革させるために、戦略的手段としての行為を遂行し、段階的に変革がめざされる。具体的な例としては、社会主義運動やマルクス主義運動が挙げられる。
- 1960年代の学生たちによる運動文化の実験と創造において、民青や一部の新左翼による学生運動は戦略的政治志向の社会運動を形成し、保持しようとしていたのにたいし、これに対抗してノンセクト・ラディカルや一部の新左翼の学生たちが志向し形成を試みた新しい運動のありかたが予示的政治だった。

■ 東大闘争では、非日常性のなかでこそ、予示的政治がかたちづくられた

- 予示的政治において、自らが他者との関係性のなかで意図せずに行使している権力や関わっている不正義や抑圧をただそうとするとき、それは自己変革や自己解放の側面を持つ。
- とくに東大闘争参加者からは、予示的政治のなかでも自己変革を強調する語りが多く聞かれた。
- 東大闘争における全共闘、とくにノンセクトにとつての 이슈のひとつは既存の大学・教員層に存在していた権威主義を批判しつつ、社会のなかでの大学や学生の責任を問うというものだった。そしてこの問題意識の論理構造は、ベトナム戦争に加担している日本政府を批判し、そのもとで安住する日本人の責任を問うというベトナム反戦運動の論理構造と相似だった<sup>5</sup>。ベトナム反戦運動の高まりのなかで東大闘争が高揚したのは、双方の運動参加者のあいだで問題把握のしかたが類似しており、とりわけ前者が後者に影響を与えたからだと思われる。結果として、東大生として、将来には他者との関係性のなかで有利な立場に立ったり、また研究活動や職業をつうじてさまざまな影響力を行使したりしうる自らのありかたをいかに問い直すか、ということが重要となった。
- また、東大闘争にはそれまで社会運動とは関わりがなかった学生たちが多く参入した。これによって、東大闘争は大きく高揚し、長期間にわたって維持されたバリケード封鎖とストライキという、非日常的な時空間が形成された。同時に、こうした学生たちにとっての社会運動の原体験が、さまざまな議論の場での認識の深化や自らの立場性の問い直しといった、日常を相対化したうえでの政治的自己形成が強調されるものとなった。

<sup>5</sup> 鶴見俊輔によれば、ベ平連代表だった小田実が戦争にかんする加害者と被害者という考え方をベトナム反戦運動のなかで唱え、1965年以降に大きな影響力を持った。すなわち、1965年ごろまで日本の人びとは、戦争というと十五年戦争において戦争を指導した日本政府の指導者を加害者、それ以外の日本国民を被害者として見なす傾向にあった。しかし、1965年のアメリカによるベトナム北爆開始のころから、アメリカによるベトナム侵攻と十五年戦争中の日本によるアジア侵攻とのあいだに存在する、行為の類似性がひろく日本人によって認識されるようになった。このとき小田実が唱えた加害者と被害者というスローガンは、「確実に民衆の想像力に火をつけた」(鶴見 2005: 106)。

1960年代後半のベトナム反戦運動では、在日米軍基地をベトナム戦争に利用することを妨げたり、ベトナム戦争に使われる兵器産業が日本で発展することを妨げたりしようとする行動がみられた。「これは日本人が、ベトナム人への加害者としてみずからをみるようになったことのあらわれ」(鶴見 2005: 106)だった。



- ある全共闘派の学科の学生たちが唱えていたスローガンに、「日常性の堰止め」というものがある
  - 社会運動や抗議活動が加熱した結果、ときに、誰のコントロールからも離れてしまい、日常を成り立たせている約束事が一旦保留になり、ある種の祝祭空間になったり、もしくは秩序が失われて暴力が剥き出しになったりすることがあるのではないか。このとき、日常の規律がいったん保留になるからこそ、そこにできた空隙に、既存の権力や文化に対抗するような、あたらしいありかたも生まれえる
  - 東大闘争では、まさにストライキや建物占拠（バリケード封鎖）によって日常性がいったん堰き止められていた。そのうえで、上記のような日常的な秩序の宙づり状態が訪れた。ここから日常に回帰したときに、日常を枠組みづける語彙・認識では、この非日常性のなかでの経験をとらえ、説明しきれない。
  - 冒頭の東大闘争をめぐる語られないこと、語りづらいことという問いに戻れば、予示的政治を生み出した東大闘争の非日常性もまた、東大闘争の語りにくさの理由のひとつなのではないか。
  
- さらに、東大闘争で萌芽的に追求された予示的政治とは、自らのありかたの問い直しを強調するものだった。そうした予示的政治は、ともにこの困難な課題に取り組む仲間のネットワークを維持する、小集団を形成する、研究者の道を選ぶといったなにかしら工夫なしには、継続が困難だろう。これも東大闘争をめぐる語りにくさの理由のひとつなのではないか。

#### 4. むすびにかえて

##### ■ 〈68〉年から50年は到来するか

今回、東大闘争調査から見えてきた「語る、語らない、語りえない」というテーマのほかに、「〈68年〉から50年は到来するか」という問いも生・労働・運動ネット富山から投げかけられていた。到来の意味は複数あるだろうが、最後にこの問いについて考えてみたい。

まず、当事者による“1968”にかんする回顧・発言は、2000年代後半から明らかに増えている。それはおそらく、当事者が退職の時期を迎えて政治的発言を自己規制しなくなった、他界する当事者も増えてきたなかで資料を保存し証言を残そうという機運が高まってきたといった理由による。この意味においては、50年は到来しているが、おそらく問いかけられた到来はこうした意味においてのものではないだろう。

では、ほかの意味においての到来ではどうだろうか。この点について考えるさいに、最初に触れておかなければならないのは、東大闘争について「語られなかったこと、語りえないこと」、すなわちこの運動が持っていた男性性や暴力の問題を考えると、同様の運動が再び発生するという意味での到来を単純に期待することは、わたしはしたくないということである。

そのうえで、まず、若者運動の高揚という意味での到来はどうだろうか。東大闘争参加者・関係者の聞き取り調査から見えてきたのは、かれらの幼少期から思春期にかけての政治的学習の濃密さだった。その語りからは、敗戦直後の学校における自由主義的雰囲気、戦争・軍事基地や貧困といった社会問題との距離の近さ、小中高での教師の活発な政治活

動・政治的発言などが浮かび上がってきた。現代の若者はこのような長期間にわたる政治的学習の経験を経てきていないために、若者運動の高揚という意味での到来はすぐには訪れないだろう。ただし、いまの若者が社会に関心がないわけではない。わたしとしては、若い世代が直面する社会問題（貧困、ブラックバイト、奨学金、非正規雇用など）に向き合い、それとの応答のなかで芽吹いている予示的政治に目を向けたいと考えている。

次に、非日常性の高まり、日常性の堰止めとしての〈68〉年の到来はどうだろうか。この点については、わたしたちの社会では社会運動が長らく「鎮圧」（大野 2014）されてきたことを想起しなければならない。国家（警察、公安、機動隊など）やマスメディアが人びとの主体性、闘争の場や言葉を管理し、抑圧してきたために、人びとの社会運動にかんする想像力は刈り取られ、貧困になっている（大野 2014: 23）。そのなかで、国家の政策や諸制度に影響を与えようとする戦略的政治志向の社会運動は評価される一方で、そもそもそうした枠組みに関心を持たない予示的政治のような社会運動にたいする関心が低くなっているのではないか、というのがわたしの感じていることである。それでも、わたしとしては、非常に困難であるだろうが、非日常性の高まり、日常性の堰止めとしての〈68〉年の再到来は望みたい。小さな空間であっても、そこに、既存の権力構造や社会規範にたいする鋭い批判性をもった、あたらしい関係性や個人の生のありかたが、いまでも編み出されているのではないだろうか。

#### ■プレ企画に参加して

最後に、大阪に戻るサンダーバードのなかでいろいろと思い巡らしたこと、大阪に帰ってから考えたことを書いて、終わりたい。

わたしは、1960年代後半の学生運動、とくに東大闘争について研究をしてきた。研究をするなかで—これは参加者への聞き取り調査に同走してくださった福岡安則先生が言われていたことでもあるのだが—当時の学園闘争について考えるならば〈その後〉が大事なのだと感じてきた。東大闘争について回想を始めると語りが止まらない、積極的に参加していなかったとしてもなんらかのこだわりを感じてしまう、そうした当事者たちがいた。そしてなにより、東大闘争をなんらかの参照点や基準点としながらその後の長い時間を歩んでいる参加者たちがいた。

本レジュメの内容に関わらせて言えば、東大闘争で全共闘派の学生たち（の一部）が模索していた予示的政治とは、自らが帯びる特権性や意図せずとも行使している権力を批判し、オルタナティブな望ましい関係性や集団のありかたを、自らがいま・この場で創出することを試みるものだった。東大闘争をくぐり抜け、予示的政治に影響を受けたならば、その後も、ときどきのいま・この場でどのように不正義や権力に対峙しているかを問わざるをえない。だからこそ、〈その後〉の歩み、生き方が問題になってくる。しかし、自らの生き方に一貫性を持たせながら、生活や労働のなかに見え隠れする権力や抑圧、不正義を批判し、さらに自らのありかたも変容させていくという、この課題に、誠実に取り組み続けることはどれほど困難だろう。こここそが、東大闘争を研究するなかでわたしが強く惹きつけられる部分であるし、同時に、自分だったらどうするだろう、自分はいま・この場でどのように生きているだろうかと、息が詰まるような重い問いかけを突きつけられていると感じる部分でもある。

生・労働・運動ネット富山代表の埴野謙二さんは、今回の企画にメールで声をかけてくださったときに、60年代後半の大学闘争を学生としてではなく、教員として経験したと自

己紹介をしてくれた。その「afterlives」として「私の現在そのものがある」とも書かれていた。それを読み、わたしは勝手にピンときたという感じがした。学園闘争で問われた自らのありようを問うということ、だからこそ〈その後〉が大事なのだということ、それを体現している人たちが富山にもいるのかもしれないと思った。

実際に1月に富山を訪れ、第1部でわたしが話をさせていただきだけでなく、第2部では生・労働・運動ネット富山の事務所にお邪魔し、さらにみなさんとお話する機会を持てた。富山大での埴野さんの講義、ネットの始まりは70年代以降埴野さんの講義に惹かれて集まった学生たちにあること、みなさんでやった養鶏場や生協、ラーメン屋、そのなかで各人がテーマを持っていろいろな運動や活動に出かけていること、そうした話を聞いた。それだけでなく、みなさんの食事をしながらの親密な会話、お互いの発言や間合いを尊重する耳のすましかた、そうしたものに接した。この時間をとおして、生・労働・運動ネット富山には、生活をともにしている者同士のような、平場の親密な関係性があること、そのなかで独特の言葉遣いと社会との切り結びかたが編み出され、共有されてきたこと、だけれどそこで閉じているのではなく、そこから外に出かけていく場であり、関係性なのだと思った。

予示的政治の継続には困難が伴う。その困難さを少しでも乗り越えるやりかたのひとつに、信頼できる仲間と小集団を一大きな組織は、いずれ組織維持のためにヒエラルキーや妥協的判断が必要になるので適さないだろう—つくり、励まし合い、議論し合いながら暮らしていくことがあるというのは、東大闘争参加者のその後を見て感じたことだった。生・労働・運動ネット富山はまさにそうした小集団をつくって、予示的政治を実践してきた人たちなのではないか。わたしも企画に参加した国立歴史民俗博物館・『1968年』 無数の問いの噴出の時代展（2017年10月～12月）の案内文にあった「この時代に噴出した「問い」はいまなお「現役」としての意味を持ち続けています」という言葉を受けて、第1部で埴野さんが、「無数の問いを現役たらしめているのは、なになのか」と問いかけられていたことは、強く印象に残った。現役たらしめているのは、反戦や公害、大学の役割といった問いをつくりだしている社会構造であるとともに、問いを問いかけ続けている各地の人びとなのだろう。歴博の案内文について話した埴野さんの念頭にあったのは、自分たちの営みなのではないかと、あの日事務所でみなさんと話しながら考えていた。

富山に息づく〈68〉年の〈その後〉を見た。散会し、ひとり富山駅前のホテルの部屋に入ったときに感じていた興奮は、いまこれを書きながらも思い出せる。ネットのみなさんのこれまでの歩み、仲間たちとどのような生活と運動を営んできたのか、そうしたことはまだ十分に聞けていない。いつかまたゆっくりと、富山でいかに〈68〉年が生まれ、息づいてきたのか、そういう話を聞きに富山を訪れたいと考えている。

## 文献

安藤丈将, 2013, 『ニューレフト運動と市民社会—「六〇年代」の思想のゆくえ』世界思想社.

有末賢, 2012, 『生活史宣言—ライフヒストリーの社会学』慶應義塾大学出版会.

Breines, Wini, 1982, *Community and Organization in the New Left: 1962–1968*, New York: Praeger Publishers.

Graeber, David, 2004, *Fragments of an Anarchist Anthropology*, Chicago: Prickly Paradigm Press.

- (=2006, 高祖岩三郎訳『アナーキスト人類学のための断章』以文社.
- Holloway, John, 2002, *Change the World without Taking Power: The Making of Revolution Today*, London: Pluto Press. (=2009, 大窪一志・四茂野修訳『権力を取らずに世界を変える』同時代社.)
- 稲葉奈々子, 2010, 「持たざる者の運動の〈予示的政治〉としての公共空間の占拠」『寄せ場』23: 13–29.
- 道場親信, 2015, 「戦後日本の社会運動」大津透ほか編『岩波講座 日本歴史 第19巻 近現代5』岩波書店, 115–48.
- 大野光明, 2014, 『沖縄闘争の時代 1960/70—分断を乗り越える思想と実践』人文書院.
- Schieder, Chelsea Szendi, 2018, “Left Out: Writing Women Back into Japan’s 1968,” Tamara Chaplin and Jadwiga E. Pieper Mooney eds., *The Global Sixties: Convention, Contest and Counterculture*, London: Routledge, 140–58.
- 高島通敏, 1977, 「大衆運動の多様化と変質」『年報政治学』(1977) : 323–59.
- 鶴見俊輔, 2005, 「加害者と被害者」, 佐々木毅・鶴見俊輔・富永健一・中村政則・正村公宏・村上陽一郎編『戦後史大事典—1945–2004 増補新版』三省堂, 106.